

若山牧水に「酒と歌」というエッセイがあります。

「今まで自分のして来たことで多少とも眼だつものは矢張り歌を作つて来た事だけの様である。いま一つ、出鱈目に酒を飲んで来た事。

歌を作つて来たとはいふものゝ、いつか知ら作つて来たともいふべきで、どうも作る氣になつて作つて来たといふ氣がしない。全力を擧げて作つて来たといふ氣がしない。たゞ、作れるから作つた、作らすから作つたといふ風の氣持である。寢食を忘れてゐる様な苦心ぶりを見聞きするごとにいつもうしろめたい氣がしたものである。

わたしは世にいふ大厄の今年が四十二歳であつた。それまでよく體が保てたものだと他もいひ自分でも考へる位無茶な酒の飲みかたをやつて来た。この頃ではさすがにその飲みぶりがいやになつた。いやになつたといつても、あの美味い、いひ難い微妙な力を持つ液體に對する愛着は寸毫も變らないが、此頃は其の難有(ありがた)い液體の徳をけがす様な飲み方をして居る様に思はれてならないのである。湯水の様に飲むとかまたはくすりの代りに飲むとかいふ傾向を帯びて來てゐる。さういふ風に飲めばこの靈妙不可思議な液體はまた直にそれに應ずる態度でこちらに向つて來る様である。これは酒に對しても自分自身に對しても實に相濟まぬ事とおもふ。

そこで無事に四十二歳まで生きて來た感謝としてわたしはこの昭和二年からもつと歌に對して熱心になりたいと思ふ。作ること、讀むこと、共に懸命にならうと思ふ。一身を捧じて進んで行けばまだわたしの世界は極く新鮮で、また、幽邃である様に思はれる。それと共に酒をも本來の酒として飲むことに心がけようと思ふ。さうすればこの廿年來の親友は必ず本氣になつてわたしのこの懸命の爲事を助けてくれるに相違ない。」

というものです。

若山牧水 42 歳の 大厄の年に、今迄の作歌と飲酒の生活を振り返り、今後の歌と酒との付き合い方をどうするかを描いているようです。

主要 7 カ国財務相・中央銀行総裁會議 (G 7) が開かれたローマで、記者会見に臨んだ中川財務・金融相の異様な姿が世界中に放映され、日本中だけでなく、世界中の視聽者に醜態を曝しました。

中川財務・金融相は、今年満 55 歳、42 歳の 大厄を遙かに過ぎ、55 歳の小厄も無事に乗り切り、本人にとっては、次の総理は自分だと思っていたかもしれません。本人は風邪薬の飲みすぎによる体調不良と言っていますが、今迄の数々の酒による失態から、今度も酒による失態である可能性もあります。

本当のことは、御自身が知るのみで、「今まで自分のして来たことで多少とも眼だつものは自民党として矢張り政策を作つて来た事だけの様である。いま一つ、出鱈目に酒を飲んで来た事。

政策を作つて来たとはいふものゝ、いつか知ら自民党の為だけに作つて来たともいふべきで、どうも国民の為に作る氣になつて作つて来たといふ氣がしない。全力を擧げて国民の為を思って、作つて来たといふ氣がしない。たゞ、作れるから作つた、作らずから作つたといふ風の氣持である。酒を忘れてゐる様な苦心ぶりを見聞きするごとにいつもしるめたい氣がしたものである。」と国民からは見えるし、「これまでよく體が保てたものだと他もいひ自分でも考へる位無茶な酒の飲みかたをやつて来た。この醜態劇で、さすがにその飲みぶりがいやになつた。くすりの代りに飲むとかいふ傾向を帯びて来てゐる。実は今回の醜態は、何時もの通り、さういふ風に飲んだために、この靈妙不可思議な液體はまた直にそれに應ずる態度でこちらに向つて来た結果である。これは酒に對しても自分自身に對しても實に相濟まぬ事とおもふ。」と本人も反省いただかなければ、国民に對してだけでなく、酒に對しても濟まないことではないでしょうか。



< 若山牧水 (1885-1928) >

明治から昭和初期の歌人。本名・繁(しげる)。宮崎県東臼杵郡東郷村(現・日向市)生まれ。早大英文学科卒。北原射水(後の白秋)、中林蘇水と「早稲田の三水」と呼ばれる。



1908年に処女歌集『海の声』出版。翌、1909年中央新聞社に入社。5ヶ月後に退社。

1911年創作社を興し詩歌雑誌「創作」を主宰。1920年沼津千本松原の景観に魅せられて、一家をあげて沼津に移住。1922年佐久ホテルに逗留し数々の作品をのこす。1926年詩歌総合雑誌「詩歌時代」を創刊。この年、静岡県が計画した千本松原伐採に対し新聞に計画反対を寄稿するなど運動の先頭に立ち計画を断念させる。

旅を愛し旅にあつて各所で歌を詠み、日本各地に彼の歌碑がある。

歌集に『海の声』『独り歌へる』『別離』『路上』など、紀行に『みなかみ紀行』『木枯紀行』などがある。

< 中川昭一 (1953-) >

自由民主党衆議院議員(8期)。志帥会会長代行。過去に農林水産大臣、経済産業大臣、自由民主党政務調査会長、財務大臣、金融担当大臣を歴任。



東京都渋谷区生まれ。東京大学法学部卒。

安倍晋三、麻生太郎と信条・政策を共有し、農政を中心に、郵政、電波、文教など幅広く政策に通じており、政策の守備範囲は広い。

自他ともに認める大の酒好きであり、事あるごとに禁酒宣言をしているが、なかなか長続きせず、2000年の総選挙の際、選挙事務所で酔った姿が全国に放映された。

サンスポ：「中川氏、バチカン博物館で“美術品お触り”」(2/22)

辞任した中川昭一前財務相（55）に21日、新たな“脱線行為”が明らかになった。失態を演じたG7（先進7カ国財務相・中央銀行総裁会議）での記者会見後、見学したバチカン博物館で、美術品の周囲に設けられた柵を乗り越えるなどしたというもの。同日、ローマ法王庁（バチカン）関係者の話で分かった。これは“もうろう”というより“酩酊”。風邪による体調不良という理由はますます怪しくなってきた。



春秋：「身から出た錆」(2/18)

「身から出た錆(さび)」。この言葉はもともと、無精なお侍を戒める意味があったらしい。身とは刀身のことである。少しでも手入れを怠ると鞘(さや)の中で錆がまわり、いざ真剣勝負の段を迎えても使い物にならず自滅してしまう、という教えだ。

G7の後の記者会見も真剣勝負にはかならないだろう。世界が注目するその場で異様な姿をさらし、ごうごうたる非難を浴びていた中川昭一財務相がやはり辞任に追い込まれた。映像を見れば中川氏は刀を錆びるにまかせ、抜くことさえままならぬ様子だった。いや、刀をどこかに置き忘れていたのかもしれない。

そんな人を重要閣僚に起用し、こんどの騒ぎでも更迭をためらったのが麻生太郎首相だ。その刀もまた錆だらけでは、と疑いたくなる。郵政民営化をめぐる妙な発言を繰り返し、元首相から痛撃を受けたのはつい先日の出来事だった。それこそ宰相の身から出た錆が政権全体にまわり、もう自滅の瀬戸際にある。

今この時にも職を失う若者がいる。町工場をたたむ経営者がいる。1円でも安い品を探す主婦がいる。なのに政治はいつまで迷走を続けるのだろうか。醜態はなにも中川氏だけのことではないようだ。錆にもいろいろあって「心の錆」といえば心の迷いを指す。それを振り切り、選挙で信を問う覚悟は首相にありや。

<身から出た錆>

「刀身から生じた錆が刀身を腐らせる」の意。自分自身で犯した悪行が原因で、自ら苦しむこと。

類義語として、『仇も情も我が身より出る』『因果応報』『自業自得』『平家を滅ぼすは平家』『身から出た錆は研ぐに砥がない』『刃から出た錆は研ぐに砥石がない』『刃から出た錆』『刃の錆は刃より出でて刃を腐らす』『汝に出ずるものは汝に返る』など。



HP「FROG BLOG& TOAD」より

天声人語：「薬と酒の化学反応？」(2/17)

酒飲みは都合のいい金言に詳しくなる。例えば ワインを飲んでいる時間を無駄と思うな。その時間、あなたの心は休養している。おかわりの言い訳に重宝しつつ、安息の液体は一滴たりとも仕事机に垂らすまいと思う。オンとオフが共倒れだ。

「心の休養」に熱心と聞けば、中川財務相の仏頂面にも親しみがわく。だが、ローマから届いた映像にはのけぞった。主要7カ国財務相・中央銀行総裁会議の記者会見である。

まぶたは重く、受け答えはしどろもどろ、あくびも出た。酒が過ぎたとは思いたくないが、画面の外にまで熟柿（じゅくし）がにおう、ふやけた絵だった。水を飲もうと、中川氏が隣の日銀総裁のコップに手を伸ばす様子をカメラがとらえている。

ご本人は国会で「風邪薬を多めに飲んだことが原因と考える」「ワインはお昼の乾杯でちょっと口に含んだだけ」と釈明した。薬と酒が未知の化学反応でも起こしたのか。

要人なら、何であれ「副作用」を計算して口に含んでいただきたい。世界経済の救済を話し合う地で、理由はともかくあの姿はなかろう。せっかくの情報発信が台無しだ。米ABCテレビのサイトは「15時間のフライトはきついものだが、お国のトヨタや日産が何万人も削減している時に居眠りしている場合か」と容赦ない。

08年10月～12月は年率で13%近いマイナス成長となった。経済の神様も意地が悪い。戦後最悪という危機に立ち向かうのは、口ばかり滑る首相と、ろれつが回らない財務相である。醜態は地球を巡り、国民の赤面は大臣の比ではない。

<薬と酒の化学反応？>

アルコールは適度に飲めば、百薬の長となり、心をリラックスさせ、夜も良く眠れるようになります。これは、アルコールに脳の緊張を抑える作用があり、それが働いているからです。

薬にも、不安や緊張を抑える抗不安薬（トランキライザー類）や、睡眠薬にそのような働きがあります。ですから決められた薬用量を服用していても、お酒と一緒に飲むと、脳の緊張を抑える働きが2倍にも3倍にも増強され、前後不覚となってしまうので、注意してください。

お酒と一緒に飲む事を注意すべき睡眠薬、抗不安薬は以下のとおり。

抗不安薬・・・セルシン、セレナルなど

睡眠導入薬・・・ハルシオン、アモバンなど



(社)長崎県医師会

編集手帳：「形容矛盾」(2/18)

「丸い四角形」はない。「銅製の鉄器」もない。形容矛盾という。では、この発言はどうだろう。「病院でゆっくり休みながら、この仕事に全力を傾注する...」

ローマで“醜態会見”をした中川昭一財務相が引責辞任した。最初は来年度の予算案が衆院を通過するまでは職にとどまるつもりで、記者会見でもそう語っていた。病院でゆっくり休みながら全力を傾注できる閣僚の仕事がこの世にあるならば、「丸い四角形」だってあるだろう。

案の定、野党のみならず与党からも即刻辞任を求める声が噴出し、辞意表明だけで済まなくなった。病床で粉骨砕身するという中川氏の悲壮な、もしくは滑稽(こっけい)な決意を麻生首相がどうして認めたか、首相の了見が分からない。

もっと早く動けば中川氏には潔いイメージを、首相自身には果断のイメージを残して幕が引けたはずである。決断を渋った揚げ句、がけつづちに追い詰められて腹をくくるという最も傷の深い脚本を選び、役を演じた。

「野党に喜ばれ、感謝される首相」という表現は以前ならば、「丸い四角形」並みの形容矛盾であったろう。今はどうだか知らない。

<形容矛盾>

撞着語法とも言い、修辞技法のひとつで「賢明な愚者」「黒い光」など、通常は互いに矛盾していると考えられる複数の表現を含む表現のことを指す。形容詞や連体修飾語、句、節などが、修飾される名詞と矛盾することとしては、形容矛盾(けいようむじゅん)と呼ばれる。

集合論・論理的には、「A であって、かつ、notA」であるということはない(矛盾律)のにもかかわらず、そうであるかのように語ることで、狭い見方をすればつじつまがあわず、単なる誤謬にすぎないように見えるが、複雑な内容を簡潔に表現する修辞法として用いられている場合もある。



余録：「財務相のG7会見」(2/17)

英外交官だったH・ニコルソンはその名著「外交」で、対外交渉に携わる者に必要な徳の一つに「上機嫌」を挙げた。どんなに不快な局面でも自らをコントロールし、機嫌よくすること。それに失敗した外交官が自国を屈辱にさらした例も挙げている。

なのに経済危機への対応をめくり先進7カ国の財務相・中央銀行総裁が協議したG7での中川昭一財務・金融担当相の常軌を逸した言動が物議をかもしている。ひどかったのは記者会見でのしどろもどろのやりとりや、終始眠そうな表情だ。いうまでもなく上機嫌からほど遠い。

海外メディアには「日本の財務相の居眠り運転」とやゆする記者も現れ、その映像も世界に流された。世界第2の経済大国の危機への対処策を世界に発信すべき場で、あの国は大丈夫なのかと疑いの視線を浴びるはめになったのが情けない。

なかでも心配になってくるのがアジア開発銀行への支援や、政策金利の現状をめぐる事実と異なる発言である。こうなると、昭和史の暗転をもたらした1927年の金融恐慌が大蔵大臣の事実誤認の失言から起こった故事までが頭をよぎる。

財務相は「体調が悪く、風邪薬と酒が相乗効果を起こした」と釈明した。どうであれ、そんな体調で国民の命運がかかる対外交渉に臨んでいいのだろうか。いきおい26カ所も言い間違いをした国会での先の財政演説も改めて思い起こされる。

折しも昨年10～12月期の国内総生産の35年ぶり2ケタ減が発表された。良い機嫌が必要なのは外交だけに限らない。戦後最悪に近い不況を前に、財政や金融のかじ取りにあたる政治家自身が国民の不安の元になっては話にならない。

<ハロルド・ニコルソン(1886-1968)>

イギリスの外交官、歴史家。外交に関する著作のほか、ポール・ヴェルレーヌやバイロンなど作家や詩人の評伝も多数著した。

テヘラン生まれ。オックスフォード大学ペリオール校卒。

イギリス外務省時代、パリ講和会議(1919年)にイギリス代表団の一員として参加。1935年から1945年までイギリス下院議員。1953年に、ナイトとなる。

著書『外交(斎藤真・深谷満雄訳)』において、公開外交や外交の民主化によって世論の影響力が強まる状況にあって、外交の立法的側面(政策決定)と執行的側面(交渉)を区別し、後者については専門家に任せる必要を説いた。

他に『外交方式の変遷 オックスフォード大学チチエル記念講演(広井大三訳)』など多数。

